

池ヶ谷横穴群

発掘調査報告書

1984

小笠町教育委員会

池ヶ谷横穴群

発掘調査報告書

1984

小笠町教育委員会

序

文化財の保護特に埋蔵文化財の発掘調査については、多額の経費と専門的技術者を必要とすること、更に経費の負担を誰がするかなど困難な問題が多く、市町村にとって悩みの頗る多い問題であることは事実であります。

現在国・県・市町村はこれらの問題を抱えながら、私達に与えられた使命として文化財の保護保存のため努力している処であります。

当町池ヶ谷集落の民有地の採土場に横穴古墳の存在が関係者より連絡がありました。この儘工事を続ければ遺跡破壊のおそれがありますので、所有者の御理解を得てこの工事を中止していただき調査についての御協力をいただくようお願いした処、心よく御承諾を下さったことに対しては感謝に堪えません。更に町はこのことを県教委員会文化課に連絡した処、お忙しい中を平野先生の視察、御指導をいただき、58年度の国庫補助事業として採択されるよう御配慮をいただきました。また調査に当っては、調査員として沼津市の渡辺康弘氏の御派遣をお手配下され、調査が順調に完了したことは望外の喜びであります。

終始この調査事業の御指導を賜わった県教育委員会文化課の諸先生方、暑い中の調査とその後のとりまとめを担当していただいた渡辺先生、仕事の都合や経済的損失があっても拘わらず採土工事にも永い間中止し、又調査期間中は種々の便宜をはかって下さった土地所有者の久保田さんの御協力に対して深く感謝する次第です。

今団調査報告書の刊行に当り、関係の方々にお礼申し上げますと共に、この文化財の保護・保存事業が私達のふるさと郷土の明るく豊かな発展のための糧となるであろうことを念じながらあいさつと致します。

昭和59年3月

小笠町教育委員会

教育長 松山昌宏

例 言

1. 本書は、静岡県小笠郡小笠町高橋 4631 に所在した、池ヶ谷横穴群 3 基の発掘報告書である。
2. 発掘調査は、昭和 58 年 5 月 30 日から 6 月 18 日までの期間を要し、国・県の補助金を得て、小笠町教育委員会が実施した。
3. 調査は、担当者に渡辺康弘（早稲田大学大学院博士課程）があたり、本書の執筆・編集も渡辺が行なった。尚、整理作業には、鈴木清子、羽鳥靖子の協力を得た。
4. 実測図及び写真等の資料は全て、町教育委員会が保管している。
5. 調査・報告に関する事務は、町教育委員会が行なった。

調査関係者名簿

小笠町教育委員会 教育長 松山昌宏 事務局長 樽松康弘 係長 大柳寅雄

宮城義信 竹内英俊

調査参加者 久保田忠太郎 久保田榮 松本初江

池ヶ谷横穴群発掘調査報告書

目 次

序
例言
目次

| | |
|--------------------------------|----|
| 1. 調査に至る経緯と調査の目的及び調査の経過 | 1 |
| 2. 環境 | 3 |
| 3. 発掘調査 | 4 |
| 1号横穴 | 4 |
| 2号横穴 | 6 |
| 3号横穴 | 8 |
| 池ヶ谷横穴群構成 | 10 |
| 4. 菊川流域における横穴群の展開と池ヶ谷横穴群 | 11 |
| I 菊川流域の横穴群 | 11 |
| A 横穴の分布 | 11 |
| B 横穴の年代 | 15 |
| 1) 須恵器編年の若干の問題 | 15 |
| 2) 横穴の生成と消滅 | 18 |
| II 池ヶ谷横穴群について一まとめにかえて | 20 |

挿 図 目 次

| | |
|-----------------------|----|
| 第1図 位置図 | 1 |
| 第2図 周辺遺跡出土土器実測図 | 2 |
| 第3図 周辺環境図 | 3 |
| 第4図 地形図 | 4 |
| 第5図 1号横穴実測図 | 5 |
| 第6図 1号横穴ノミ痕拓影図 | 5 |
| 第7図 2号横穴実測図 | 6 |
| 第8図 2号横穴ノミ痕拓影図 | 7 |
| 第9図 3号横穴実測図 | 9 |
| 第10図 3号横穴棺床実測図 | 9 |
| 第11図 横穴群分布図 | 12 |
| 第12図 蓋・坏関係図 | 16 |
| 第13図 蓋・坏計測図 | 16 |
| 第14図 蓋・坏法量図 | 16 |
| 第15図 須恵器編年図 | 17 |

圖 版 目 次

- 圖版 I 1. 遺跡遠景1 2. 遺跡遠景2 3. 調查風景
- 圖版 II 1. 2・3号横穴完掘狀態
- 圖版 III 1. 完掘遠景 2. 1号横穴開口部 3. 1号横穴奥壁
- 圖版 IV 1. 2号横穴開口部 2. 2号横穴奥壁 3. 2号横穴排水溝
- 圖版 V 1. 2号横穴天井部ノミ痕跡 2. 2号横穴天井後部ノミ痕跡
3. 2号横穴右側壁ノミ痕跡
- 圖版 VI 1. 3号横穴封鎖狀態 2. 3号横穴開口部狀態
- 圖版 VII 3号横穴棺床狀態
- 圖版 VIII 1. 3号横穴完掘狀態 2. 3号横穴床面狀態 3. 3号横穴右側壁狀態
4. 3号横穴天井部ノミ痕跡

池ヶ谷横穴群発掘調査報告書

1. 調査に至る経緯と調査の目的及び調査の経過

小笠町内には、古くから「バクチ穴」と称されてきた横穴が、山裾に点在して開口しており、昭和56年までに41群145基の横穴が確認されていた（県教委・1983）。

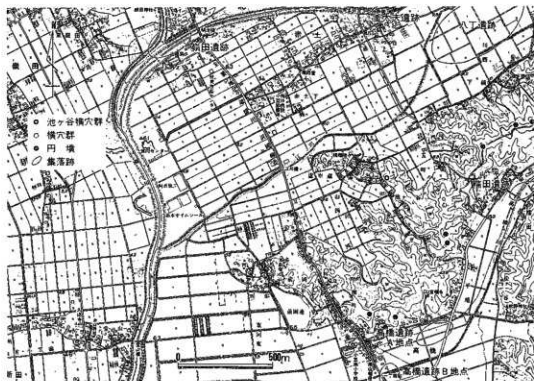
昭和57年5月、池ヶ谷の丘陵において採土作業中に横穴が開口したとの連絡が町教育委員会にもたらされた。町教育委員会は早速採土作業の中止を業者に要請し、業者もこれに応じた。翌6月に町教育委員会は今後の横穴の取扱いについて業者と協議し、12月に県教育委員会と協議した結果、昭和58年度に国および県の補助金を得て発掘調査を行なうこととした。翌58年1月には県教育委員会文化課平野吾郎指導主事の派遣と現地視察を得て、町教育委員会は事業計画をまとめた。

本横穴群は新発見の横穴群であり、従来「池ヶ谷横穴群」と称されてきた箇所（小笠町 No.30、31 県教委1983）とは別である。しかしながら、地籍、字名からは本横穴群を「池ヶ谷横穴群」と呼称するのが適当であり、従ってこれまでの横穴群を「三ツ池横穴群A群・B群」と仮りに改称しておきたい。

とりあえず町教育委員会では、既に開口している2基の横穴について発掘調査を実施し、周囲についても確認調査を行ない横穴の有無を確認した上で、再度遺跡の取扱いについて協議することにし、昭和58年5月30日から発掘調査を開始した。

30日には、まず杭打ちと下草刈りから始めた。当初1、2号横穴は重機によって羨道部半ばまで削平されており、また玄室内は既に盗掘を受けていることが明らかであった。

31日には両横穴の排土に着手し、6月1日にはこれを完了して実測作業にはいった。



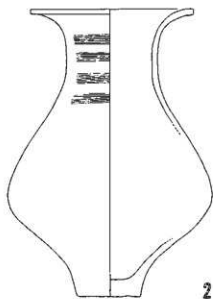
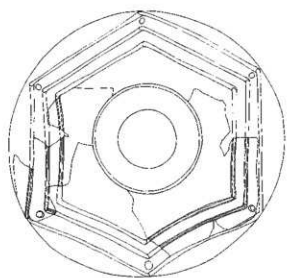
第1図 位置図

調査に至る
経過

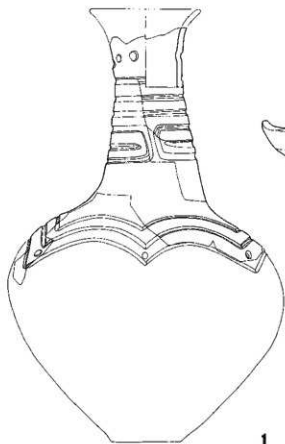
名称の異同

調査の目的

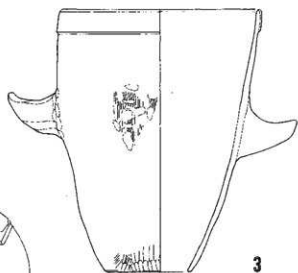
調査の経過



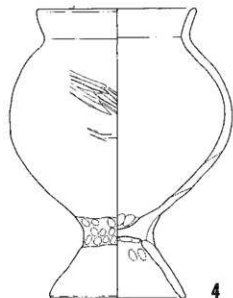
2



1



3



4



第2图 周边遗址出土土器实测图

2日から5日まで現地作業を中止したが、7日までに両横穴の実測を終了した。

現場近くには標高を求めるための基準点がなく、当座は仮ベンチからの比高を記録していたが、8日には、町立南小学校前の水準点からレベルを移動し、仮ベンチの海拔値20.12mを得た。9日は現地作業を中止したが、11、12日には丘陵の地形測量を行った。

10日には2号横穴の東側に落盤箇所を発見し、ボーリングステッキにて確認作業を行ない、その結果封鎖石を認めて横穴の存在が確認された。これが3号横穴である。

地形測量と並行して墓前域の排土作業を行ない、13日には完存していた封鎖部の実測、解体を始め、14日にはこれを終了し、引き続き玄室の実測作業に着手した。16日には3号横穴に係わる全ての作業を完了した。

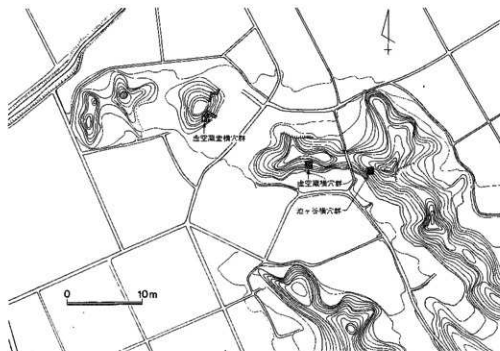
さらに重機にて探土予定範囲内の横穴の有無を確認することにし、その結果18日までに横穴が存在しない事を確認して、全ての現地作業を終了した。

2. 環 境

南流する菊川と牛瀬川およびこの各支流が形成した山塊には、古墳群や横穴群が数多く分布している。これらの分布については後節で考察することにし、ここでは平野部の開発について触れてみたいと思う。

平野部の河川は洪水のたびに流路を変え、人々の生活は変更を強いられたと想像される。 平野の開発

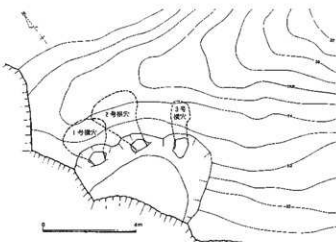
弥生時代中期になると人々は沖積地の開発に乗り出し、自然堤防止を生活の拠点とするに至ったが、代表的なこの時期の遺跡には嶺田遺跡がある。第2図-1は嶺田遺跡から出土した長頸の甕で、全面に丹彩を施し、楕円式土器の様式とされる土器である。第2図-2は、出土地点は明確でないが、朝日Ⅲ形式に併行すると考えられる甕で、大きく外反する口縁部を有し、頸部に4段の横線文を施し、これに180度単位で垂下するナデ消しを加えている。後期には菊川町白岩遺跡等の巨大な遺跡の成立をみるが、古墳時代になっても平野部の集落は、前代を引き継いで沖積地の開発に活発に取り組んでいたと考えている。 嶺田遺跡



第3図 周辺環境図

八丁遺跡 第2図-3、4は八丁遺跡からセットで出土した瓶と台付甕である。6世紀後葉に比定できようが、同形態の土器が輪田遺跡(小笠町・1982)からも出土し、共に自然堤防上の遺跡である。

釜太夫遺跡 また釜太夫遺跡をはじめとして、平野部の各地から古墳時代後期から奈良時代にかけての遺物が出土しており、沖積地における、広範な遺物散布をみる大規模な遺跡の成立は、平野部の開発の成功を物語っていると考えるであろう。



第4図 地形図

この成功こそが爆発的な横穴群の盛行として現象すると考えている。肥沃ではあるが排水が困難であった平野の開発は、洪水との闘いの中で最近まで続いたのである。

3. 発掘調査

本横穴群の周辺には、第3図に示したように虚空蔵堂横穴群、虚空蔵横穴群、三ツ池横穴群(仮称)が分布し、本横穴群は前二者の横穴群と共に虚空蔵の丘陵南斜面に占地して同一支群を形成すると考えている。中でも本横穴群は3基の横穴からなり、西に向けて延びる細長い台地の中腹に南面して開口し、水田比高約15mを測る。これら3基の横穴は標高22m付近に並んで開口し、西から順に1号横穴、2号横穴、3号横穴と命名した。

1号横穴

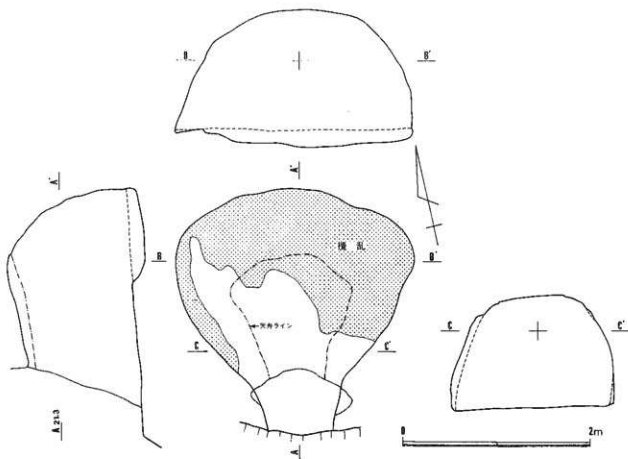
玄室 本横穴は主軸方位をN13°Wにとり、残存長2.60m、玄室最大幅2.52m、玄室最大高1.31mを測り、羨道部幅は0.69mを測る。玄室平面形は三角フラスコ形を呈し、玄室断面形はドーム形を呈する。

調査前に既に開口していた本横穴は、玄室と羨道の区別がそのくびれ部において比較的明瞭に判断でき、玄室長はおよそ2.0mを測ると思われるが、この玄室平面形態は同一丘陵に位置する寺の谷横穴群(県教委・1983)をはじめとする周辺地域の横穴のそれと類似しており、またそれらの横断面形が長方形ないしは台形に近くなるのに対し、本横穴でも水平堆積した地層の界面に沿うように、天井と床面をつくっていて、周辺の横穴の形態は類似していると言える。

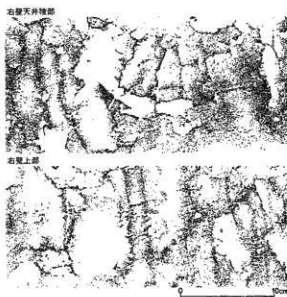
床面は奥半と右端が盗掘をうけ攪乱されていたが、菊川町東平尾しいでの谷横穴群A群3号横穴(県教委・1983)等にもみる板石の棺床や礎床が奥壁近くに設けられている例から推して、その攪乱箇所と同様な内部施設が存在したのではないかと推定される。

羨道 羨道部は床面の一部が残存していたに過ぎないが、玄門部には段差等の区画施設を設けず、玄室からそのままの傾斜で床面が羨道に連続していた。この天井部は完全に破壊され、封鎖施設もなかった。

ノミ痕 それでも玄室側壁と天井のノミ痕は良好に残存しており、細かな観察が可能であった。奥壁は風化が進行していたが、その下半には断面弧状をなす、幅8cm以上を測る上一下の平行ノミ痕が観察できた。鉄製U字型鍬先の使用が想像される。



第5図 1号横穴実測図



第6図 1号横穴ノミ痕拓影図

が区別して用いられ、特に床面近くの側壁下方と天井部の造り出しを丁寧に加工を加えていた。

以上に述べた本横穴は、遺物の出土が全く無かったものの、後述するようにこの規模と形態から最初に構築された横穴であると理解している。

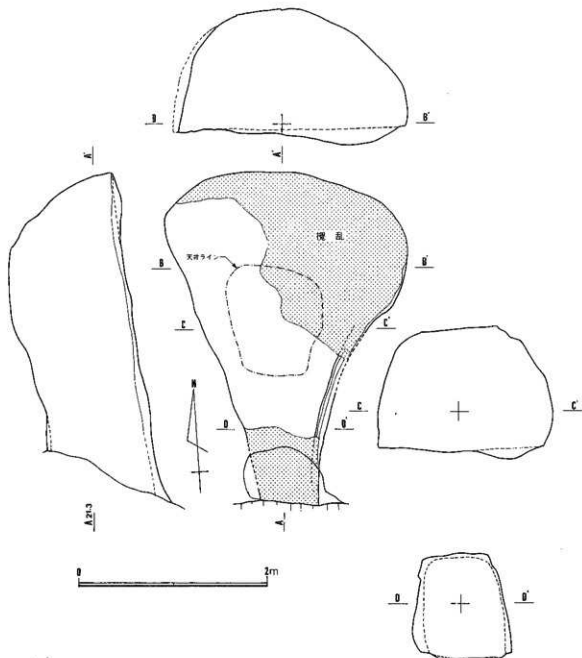
これに対し右側壁では、その下半には同じく鋸先による平行ノミ痕がみえ、仕上げが丁寧になされていた。上半には第6図上に示したように幅2.5cmを測る上→下のウロコ状ノミ痕と平行ノミ痕が、また同図下に示したように天井部校線部分には同じノミによる奥→開口部のウロコ状ノミ痕がみえる。さらにそこには亀甲状の丁寧な加工を示すノミ痕が観察された。

これらの仕上げ用のノミに対して荒掘り段階の幅1.7cmを測る打ち込みのノミ痕が、右側壁のほぼ中央にみえる。このように本横穴では仕上げ用に2種、荒掘り用に1種のノミ

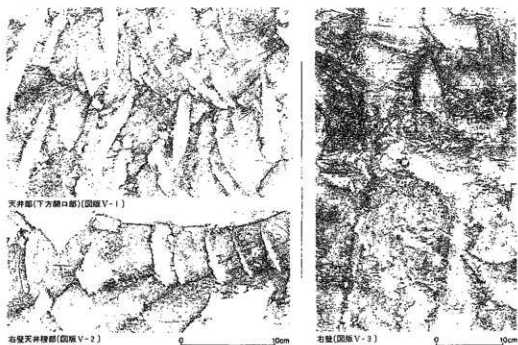
2号横穴

本横穴は3基の横穴の中央に位置し、主軸方位はN4°Wをとり、1号横穴に近似している。残存長3.48m、玄室最大幅2.48m、玄室最大高1.20mを測る。

- 玄室 玄室平面形は三角フラスコ形を残存しながらも、右側壁の立ちあがりはほぼ直線を呈し、玄室と羨道の区別は不明瞭で、1号横穴のプランよりも退嬰化した様子が窺える。本横穴も調査前に既に開口しており、玄室床面の東半部と羨道部床面が攪乱されていた。あるいは1号横穴と同様の内部施設が設けられていたのかも知れない。
- 羨道 羨道は現開口部で幅0.82m、高さ1.07mが復元できるが、封鎖施設は残存しておらず、玄門部分にも段差等の区画施設を設けていなかった。



第7図 2号横穴実測図



第8図 2号横穴ノミ痕拓影図

左側に沿って、床面には残存長0.87m、幅12cm、深さ3cmを測る排水溝が設けられていた。

玄室の形態を詳しく観察すると、その断面形はドーム型を呈するが、1号横穴と同様に本横穴の天井部は平坦につくられていて、羨道の天井はそれよりさらに低くつくられている。また横断面形はアーチ形を呈するが、天井平坦面を通るラインでは合形に近く、羨道では方形に近づいている。こうした傾向は、1号横穴と同様にこの地域の一般的な傾向を示していると指摘できる。

本横穴のノミ痕は良好に残存していた。奥壁は荒い仕上げで随所に幅1.2cm以上を測る荒削り段階の打ち込みノミ痕が観察された。奥壁の左半部でも床面近くには右上→左下に平行ノミ痕が認められたが、U字形鋸先の仕上げが施されたか否かについては不明である。

これに対し右側壁のノミ痕は、その下半部には幅11.6cmを測るU字形鋸先を用いた痕跡が残っていたが、特に入口部分を意識してか、開口部側に丁寧な加工がなされていた。その奥壁側には幅6.2cmを測る上→下の荒削り段階の平行ノミ痕が観察され、このノミ痕の上を再び仕上げるために、U字形鋸先による加工がなされていた(第8図3、図版V-3)。

さらにその上半部には上→下の鋸先痕もみえたが、特に天井付近では、幅6.2cmを測るノミ痕が、奥壁→開口部、上→下にウロコ状に連続する状態が観察できた(第8図2、図版V-2)。加えて天井部平坦面には幅1.2cmを測るノミ痕が無数にみえたが、中でも羨道天井面には幅広のノミを中央から左右に振り分けるように開口部へ向う加工が観察された(第8図1、図版V-1)。

以上のように本横穴でも仕上げ用と荒削り用の計3種類のノミを使い分けており、1号横穴と類似する加工が窺えた。

本横穴からも遺物は出土していないが、玄室の形態と壁面整形の簡略化から、1号横穴に続いて構築された横穴であると理解しておきたいと思う。

排水溝

玄室断面形

ノミ痕

3号横穴

発掘調査によって新たに発見された本横穴は、内部施設に板状の略方形を呈する石塊を並べた棺床を有し、封鎖施設も完存し、墓前域も備えていた。主軸方位はN38°Eである。

玄室 最も東側に位置する本横穴は、全長3.08mの規模を有する小型の横穴で、玄室長1.13m、玄室最大幅1.05m、玄室最大高0.82mを測る。玄室平面形は大略隅丸方形を呈し、玄門部にくびれを有することで玄室と羨道を区別できるが、羨道と墓前域は明確に区別されず、ここでは開口部より前方を墓前域と考えておきたい。

羨道 羨道は幅0.8m、高さ0.85mを測り、羨道長はおよそ1.2~1.5m程度と考えられる。ここに封鎖石が完存していた。

墓前域 墓前域は、長さ0.6m程、幅0.8m程を測る略三角形の平面プランを有する。そして玄室から羨道、墓前域にかけては段差等の区画施設を設けず、連続した床面を形成していた。

封鎖石 封鎖石は開口部直下から、およそ羨道全体の範囲に、ほぼ天井の高さまでぎっしりと円礫を積み上げていた。従って埋葬空間としての玄室有効長は1.2mとすることができる。この封鎖石の下部には、わずかに黄色砂質土の流入がみられたが、本横穴の封鎖は円礫のみで果されたと考えられる。

棺床 棺床は5枚の板石とその間隙を埋めた3点の円礫で構成されていた。板石は略方形を呈し、これらは水平堆積した地山砂岩を剝離、整形したもので、第10図に示した1が29kg、2が10.2kg、3が10.4kg、4と5が共に15kgを量った。

この棺床は長さ1.66m、幅0.79mの範囲を占めていたが、これは玄室内に納まるだけでなく、羨道の半ばに及んでいた。従って見かけ上の玄室と羨道の区別は最早実体ではなく、本横穴が両者の区別を喪失した段階の横穴、即ち「筒型構造」の内に入れてもよいと思われる。

本横穴は凶骸置に示したように、この壁面は粗雑なつくりであった。

ノミ痕 右側壁に残っていたノミ痕は、天井近くに上→下の幅9.4cmを測る平行ノミ痕が観察され、特に奥壁近くには、幅1.7cmを測る水平方向のノミ痕が、開口部→奥壁方向にみられた。後者は荒掘り段階のノミ痕と考えているが、この種のノミ痕が側壁の中程には各所にみえる。またこの中央には上→下の幅広のノミによる平行ノミ痕が観察できる。そして床面近くのノミの運びは比較的丁寧であった。

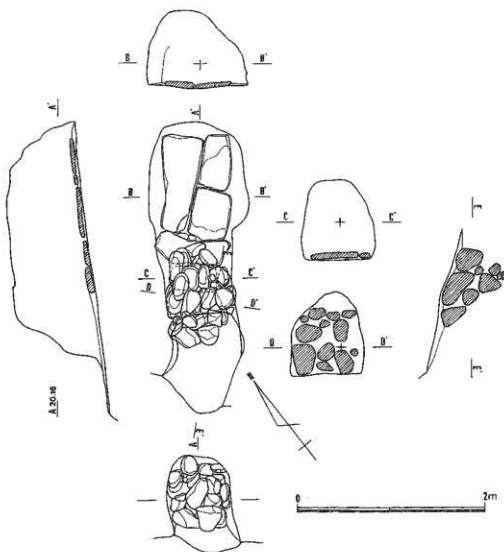
また奥壁にも荒掘り段階の打ち込みノミ痕が残っていた。

以上のように本横穴の壁面は仕上げ整形がほとんどなされず、幅9.4cmと1.7cmの2種類のノミが用いられていたが、前者はU字形鎌先と考えられ、3基の横穴は共通して同種のノミが用いられていたと理解できる。

尚、本横穴からも遺物の出土が全くなかった。

葬制の問題 以上に述べたように、本横穴からは副葬品も人骨も出土しておらず、葬制の上でいくつかの問題点を提供していると言える。

- 1) 玄室と羨道の区別は、床面段差等がないものの、玄門にくびれを有していて、当時意識されていたと想像される。しかしながら棺床が羨道に及んでいることから、本横穴は二室構造をとらず、埋葬空間としての玄室は本来の機能を喪失していると言えよう。
- 2) 本横穴は封鎖石が完存していたことから、本横穴は盗掘されていないと判断できる。
- 3) この封鎖石は棺床の半ばまで達し、これから測定された玄室有効長は1.2mと一体



第9図 3号横穴実測図

の人間を伸展葬するには十分ではない。

- 4) 本横穴から人骨、副葬品の出土はなく、従って追葬時の片付けは行なわれていない事は確かである。このような諸点から推して、本横穴は1)の二室構造が最早観念されなくなった段階の、謂わば終末期の横穴であると云えるであろう。

また2)、3)、4)からは、本横穴が第一に全く使用されなかったか、第二に

追葬時に人骨や副葬品の全てを横穴外に全て投棄してしまったのかの二つの問題点がまず浮んでくるであろう。第三には埋葬にあたっては土器等を副葬しないとも考えられる。

第二の問題点については、石室墳を含めた古墳時代後期の葬制が追葬を前提として成立していること(渡辺・1982、渡辺・1983)と封鎖石を完存させている横穴、例えば掛川



第10図 3号横穴棺床実測図

市別所横穴群1号横穴(松本・1983)においては玄室内に3体の人骨と装身具、副葬品が納められていたことから、通例としては追葬時に玄室内を整理する際、玄室内の内容を外へ運び出すことはないと思像している。

ただし、小笠町猿渡横穴群1号横穴(佐藤・1983)におけるように、玄室内には直刀一振り副葬されるだけで、土器類は墓前域にまとめられていた例もあり、また同2号横穴からは1号横穴と同様にほぼ封鎖石が完存しているものの遺物が玄室内からも墓前域からも出土しない例もあり、上述の原則が各地で完徹されていたか否かは、第三の問題点とも相まって迷断し難いところがある。

第一の問題点については、玄室有効長が1.2mと短かい点からも、本横穴に関しては十分に可能性がある。所謂「寿墓」として制度化されていたかどうかは疑問であるが、掘削に要する時間を考慮すると、「モガリ」の問題を含めて、このような視点から考え直すなくてはならない点もいくつかあろう。

いずれにしても、本横穴は横穴の葬制の根幹に関わる問題を提示してくれた。

確かに第二の視点は可能性が低いと言えようが、第一と第三については現在までのところ判断を下すのは困難である。特に第三の視点については、時代を追っての葬法の簡略化であり、この地域の特異性であると想像するのは易いが、ここでは迷断を避け、資料の増加を待って考察したいと思う。

池ヶ谷横穴群の群構成

本横穴群を構成する3基の横穴からは遺物の出土がなく、恐らく7世紀代に属する横穴群であろうが、それらに確実な年代を与えることができなかった。

単位群 本横穴群は3基の横穴で構成される一単位群の横穴群である。また虚空蔵横穴群は標高10.5m付近に開口する5基の横穴からなり、本横穴群とは別群の横穴群である。

本横穴群の1号と2号の横穴は主軸方位も同じくし、規模も近似しているが、3号横穴はこれらと主軸方位も形態も相異している。しかしながら3基の横穴は等間隔をもって構築されている点は注目してよいであろう。また既に述べたように1号、2号横穴は盗掘されており、内部施設は不明であるが、その攪乱の形状から板石による棺床が存在していたと想像される。

築造順位 3基の横穴の前後関係については、二室構造から一室構造への変化、玄門の退化という観点から眺めてみると、1号、2号、3号横穴の順で西から東へ順次横穴が構築されたと考えられる。また壁面整形の簡略化もこの順序を裏付けていると言えよう。

小笠町内の横穴群は、最大でも20基ほどが集合して一群を形成しているものが多く、東遠江の地域でも密度は低い。本横穴群の場合も造墓集団は小規模で、従って平野部の開発に投下された労働力もこれに比例して小さかったと考えている。

4. 菊川流域における横穴群の展開と池ヶ谷横穴群

I 菊川流域の横穴群

A 横穴の分布

B 横穴の年代

1) 須恵器編年の若干の問題

2) 横穴の生成と消滅

II 池ヶ谷横穴群について —まとめにかえて—

これまで述べてきた池ヶ谷横穴群の3基の横穴は、遺物の出土がなく、時期を明確にすることができなかった。また、それぞれの横穴の形態も一般的と呼べるものであった。

従って、菊川流域の横穴についてその分布や年代を検討した上で、本横穴の歴史的位置を考えてみたいと思う。

I 菊川流域の横穴群

横穴の形態には、内部構造のバラエティーとあわせて、地域的なまとまりが看取できる一方、同一の支谷に形成された横穴群にあってもそれらが相違している状況がみえる。

しかし、その形態の変化は横穴自体の「小型化」と「玄門部の不明瞭化」という二要素の、年代を追っての変化と考えられ、最終的には「筒型構造」として現象するものと考えている。

例えば掛川市本村横穴群（県教委他・1968）や浜岡町小掘山横穴群（池谷・1962）では、その出発点となる横穴が楕円形の平面形を呈しており、従って方形から楕円形へと、コーナー部分の鈍化に着目し、これを時間をおっての変化と考えるわけにはいかないのである。換言すれば横穴は、各地に定着したその初期から形態にバラエティーを持っていたと言えよう。また平入り、妻入りの両基本形態についてもこれを時間差か、あるいは地域差か、にわかに判断し難いのが現状である。

しかしながら、様々な形態を有していた横穴も次第に、玄室と羨道の区別を喪失し（二室構造から一室構造への変化）、小型化（玄室有効長の短縮）しつつ、「筒型構造」の横穴へと変化するのには確かであり、またこの種の横穴が横穴分布地域には普遍的にみられることから、この推移は広範で一般的であったと言える。しかしこの現象が形態の漸次的な変化の結果であるのか、あるいは一時期に各地に受容されるに至ったのかは、残念ながらうまく説明できない。それでも後段でこの問題については再度付言したいと思う。

A 横穴の分布

1983年、平野吾郎氏は菊川流域の横穴群の分布を、以下の各支流域に分けて考察した。

I群：国鉄菊川駅北側の大淵ヶ谷横穴群を中心とした、篠ヶ谷横穴群、山本横穴群を含む約100基の横穴群。

II群：小笠町上内田、中内田地区の杉森横穴群、政所横穴群、東平尾横穴群等の約80基の横穴からなる一群。

III群：菊川左岸の大東町岩滑ハケ谷横穴群を中心として点在する小規模横穴群。

IV群：下小笠川流域の大東町毛森山横穴群を中心とする横穴群。

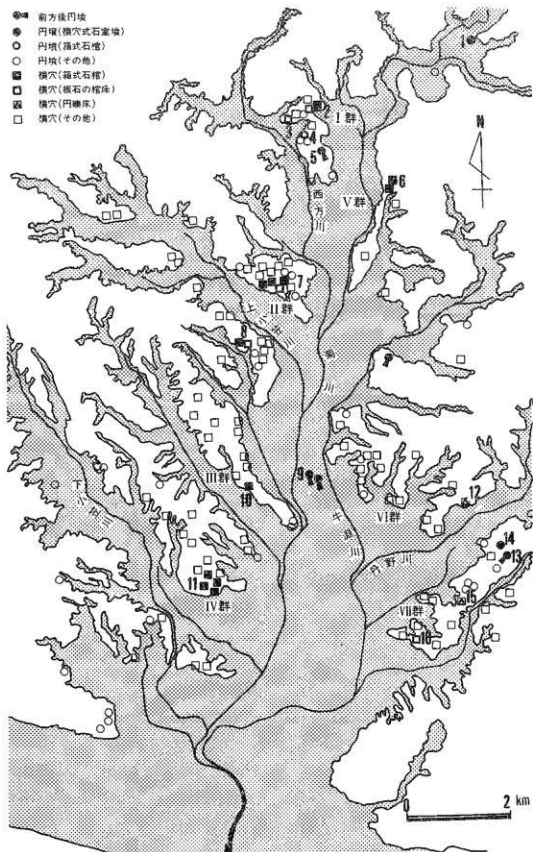
V群：菊川左岸に位置する、菊川町下本所横穴群を中心とする一群。

横穴の形態

筒型構造

楕円形プランの横穴

各支流域の横穴の分布



第11図 横穴群分布図 1. 上ノ段古墳 2. 大淵ヶ谷横穴群 3. 山本横穴群 4. 高田ヶ原2号墳 5. 大徳寺古墳 6. 下本所横穴群 7. 杉森横穴群 8. 東平尾横穴群 9. 上平川大塚古墳 10. 岩舟・バツヶ谷横穴群 11. 毛森山横穴群 12. 猿渡横穴群 13. 舟久保古墳 14. 代ノ谷古墳 15. 寺ノ谷横穴群 16. 池ヶ谷横穴群

Ⅵ群：丹野川流域の小笠町春日山横穴群、猿渡横穴群からなる一群。

Ⅶ群：高橋川流域の小笠町寺の谷横穴群を中心とする一群で、本横穴群を含む。

このⅦ群は、厳密には丹野川を挟んで対峙する一群と高橋川に面する一群に分れると思われる。

総じて菊川流域の横穴群は、主要河川である菊川、牛淵川、丹野川が解析した丘陵の縁辺部に多くが集中して分布する傾向があり、それらの支流がつくった小平野の縁辺に分布する横穴群は比較的小規模であるといえよう。そしてこのような大・小、粗・密の差は恐らく平野の開発に投入された人員の規模の違いを反映していると想像している。

第Ⅱ図にはこれら横穴群の分布、高塚古墳の分布及び両者の内部主体を示してみた。これまで横穴群と群集墳の関係については、それぞれの「相補分布」を手掛りに、東遠江の地域の様相を整理してきた。その結果、この地域では『古墳から横穴への移行』が6世紀後半には終了しているのではないかと推測された。

本来、古墳と横穴は異なった形態の同時代の墓であるが、追葬に基づくその葬送観念は同一であることが確められた。そしてこの東遠江の地域では、葬制の上から6世紀前半代の木棺直葬墳と両者は繋がらず、また6世紀後半代には横穴式石室墳と横穴が共に出現し、7世紀前半代には両者が相補分布することと、横穴が爆発的に増加することからそこには被葬者間の生産力の相違が考えられるに至った。その史的契機になったのは後述するように「⁴屯倉」の設置が最も妥当と思われる。

そこで菊川流域の古墳と横穴の分布を比較してみると次のような特色が見える。

1. 菊川と西方川の合流点より北側では、その両河川の解析に取り残されるように広がっている台地上には、前方後円墳と考えられている大徳寺古墳をはじめ、埴輪を出土した円墳である高田ヶ原1号墳、同3号墳に加えて同2号墳からは組合せ式箱式石棺の出土が伝えられている。そしてこの台地上には横穴が分布していない。
2. I群の大淵ヶ谷横穴群が位置する丘陵上には、直葬墳が発見されている。遺物の出土がなくその時期を明確にし難いが、掛川市岡津横穴群や本村横穴群例のように、それらを横穴に築造に先行する6世紀前半代に置くことができよう。東遠江の他地域と同様に菊川流域においても、石室墳の成立を介在させずに直葬墳から横穴への転換が行われたと考えたい。
3. II群、III群、V群、VII群の横穴群分布域には数少ないながらも丘陵の尾根線上に円墳の分布が見られる。その中でも発掘調査された例は小笠町寺ノ谷古墳を除いてほとんどない。また同じ台地上には箱式石棺直葬墳と考えられる代の谷古墳がある。この寺ノ谷古墳は、5世紀代の前方後円墳である舟久保古墳から連続し池ヶ谷横穴群も所在する丘陵に位置し、先年静岡大学によって調査されたが報告書は未刊で、その内容は全く不明である。それでも県遺跡地名表に拠れば3号墳からは埴輪が、1号墳からは鉄刀、管玉、ガラス玉が出土しているとのことであり、また寺の谷横穴群が盛行するのは7世紀に入ってであって、同時期に存在したとは思われない。むしろ2と同様な傾向を重視すべきであろう。
4. 菊川流域で現在までに確認されている横穴式石室墳は、菊川町上ノ段古墳だけである。同町遺跡台帳の記載に拠れば、この古墳は円墳で、鉄刀と須恵器が出土しているようである。また横穴分布地域からは大きく離れており、明確に相補分布を示している点は重要である。

古墳から横
穴へ

石室墳

古谷1号墳

また小笠町古谷には、古谷1号墳（仮称）があり石室墳と考えられる。この古墳は、植田氏の茶畑内にあり、改植時にひと抱えもある河原石が壁をなして出土したとのことで、現在も茶畑の隅に架構材の一部と考えられる礫が片付けられている。発掘調査を実施してからでないとはっきりした事は分からないが、牧ノ原台地をひかえた、小笠町でも最も奥まったこの地域に石室墳が造営された事は注目してよいであろう。さらに加えて周辺は横穴の分布地域ではなく、この地域でも横穴と石室墳が相補分布していると想像される。掛川市平塚古墳と同様に、横穴被葬者層が主導した開発には参画しない集団の墓と理解したい。

- 再度、菊川流域の古墳と横穴群の分布を眺めると、比較的横穴群の分布が疎な下小笠川流域では、少ないながらも小円墳群が分布している。また上小笠川流域では小円墳群の分布が皆無であるのに対し、少数ながら横穴群の分布が確認できる。

1と4で確認した地域を加えて、古墳と横穴群との間に相補分布が確認できる地域もあるが、横穴群が密集する大部分の地域はこれを示していない。

以上のように菊川流域においては、相補分布がはっきりしない地域では、横穴被葬者層は前代の小円墳に葬られた人々の生産基盤を引継いだものと思われる。

しかし他方では上ノ段古墳にみられるように、横穴を造営しなかった集団が横穴墓制の活性化に対し比べるべくもなく急落してしまう点は留意すべき事柄である。

横穴被葬者

それでは横穴被葬者集団と古墳被葬者集団の関係はどうかであろうか。

この点については埋葬主体の比較から考えてみたいと思う。菊川流域の横穴群には次のような埋葬主体のバラエティーがある。

- 組合わせ式箱式石棺：菊川町大淵ヶ谷横穴群、同町篠ヶ谷横穴群、同町西宮浦横穴群、同町下本所横穴群、同町杉森横穴群、大東町毛森山横穴群等の菊川流域野横穴群分布域のほぼ全域に分布している。
- 板石による棺床施設：比較的菊川の中上流域に濃く分布する1の埋葬施設に混じって、本横穴群3号横穴、菊川町大淵ヶ谷横穴群、同町山本横穴群（A群11号）、同町東平尾しいでの谷横穴群（A群2号3号）、同町政所横穴群（1号）、同町杉森横穴群等に見られる。
- 河原石の礫床施設：菊川町東平尾橋本ヶ谷横穴群（2号）、小笠町寺ノ谷横穴群（15号）、同町猿渡横穴群（1号）をはじめ菊川流域でも比較的下流域に分布している。またこれより南部の新野川、箆川や萩間川流域ではこの種の施設を有する横穴群が多い点は注目できる。

古墳の埋葬施設

その他の施設としては、造り付けの石棺（大東町岩滑八ヶ谷横穴群2号横穴）、棺囲い石を有するもの（小笠町猿渡横穴群2号横穴）などがあるが、実際には土間造りの横穴が多いのである。

横穴に見られるこのような多彩な埋葬施設に対し、調査例が少ない事も手伝って古墳の様子ははっきりしていない。先に触れた菊川町高田ヶ原2号墳から組合わせ式箱式石棺の出土が伝えられ、また小笠町代の谷古墳で確認されているだけである。従ってこの数少ない例から推測するしかないが、同種の埋葬主体をそれぞれが持ち、しかも新たに導入された墓制である横穴にそれが採用されている事実から、恐らく両造墓集団は同一傘下に属し

た、同祖の集団であったとして大過無かろうと思う。

東遠江の地域で広く確認できるこのような両者の集団関係は、横穴群の増大を促した大規模開発の主体が同じ集団であって、逆にこの考えに従えば横穴の被葬者集団が全て渡来系集団であるとする考え方は否定されるべきである。

確かに、古墳時代の集葬の動態からこの論拠を補強しなくてはならないが、横穴群の分布から推して、古墳時代後半の開発は在地勢力の改変を経ずに、これに参画した人々への横穴造墓権の拡大によって遂行されたのではあるまいか。この事柄が『古墳から横穴へ』の転換として現象すると考えられる。

問題はその直接の契機が何であったかである。

B 横穴の年代

1) 須恵器編年の若干の問題 従来、県内の須恵器編年は遠考研編年を基に川江秀孝氏、大塚淑夫氏によって整理され、また最近では鈴木敏則氏による編年案が示されている。さらに藤原京をはじめとする宮都出土の須恵器編年が公になり、中央と地方の対比が可能になる一方で、両者がうまく噛合わない状況も出てきている。

特に墳墓においては、須恵器の年代をもって追葬の回数を判断しているためその編年はより精緻にならざるをえないのである。ここでは7世紀代の坏身にかぎって考えを述べ、横穴の年代を追っての変化を検討してみよう。

川江秀孝氏(川江・1979)は、それまで7世紀後半に比定されてきた第VI期後半の坏蓋を4種に分類した上で、県下の29の古墳について第VI期前半の資料との共伴関係を整理した。その結果a類とした、口径11cmほどの乳頭状のつまみを付す第VI期後半の坏蓋が第VI期前半の資料と共伴する傾向が強く、また口径13cmほどで偏平な甕蓋球状のつまみを付すb類やつまみの頂部が窪むc類はそれとの共伴が少ないことが知られた。

川江 編年

ここでいう第VI期前半の須恵器とは前代からの器形を残した、受け部径が11cm前後と最も小形化した段階のものであり、伊場遺跡ではこれと第VI期後半の須恵器が別々の土層から出土していて、両者に年代差を与える根拠となっていたが、少なくともa類とした第VI期後半の須恵器は第VI期前半の須恵器と共伴するのではないかと考えられるに至った。

鈴木敏則氏は「半田山古墳群A群」の報文(鈴木・1984)で、第VI期前半の蓋受け部と第VI期後半の身受け部の形態上の類似に着目して、前半と後半の須恵器坏に併行関係を認めようとした。氏は川江氏のa類の出現を7世紀第II～III四半期に置いている。

鈴木 編年

しかしカエリ部の形態差は果たして年代差と認定出来るであろうか。量産を指向した結果、須恵器に現象した個体差を我々は型式差であると認識してはいないだろうか。

いずれにしても氏の編年観の論拠はカエリの形態差にあるが、これに対して法量の差に年代差の根拠を置く人もいる。

中でも西弘海氏は、須恵器は銅碗の模倣形であるとの視点とそれぞれの形態差を越えた法量の互換性を認めた上で、畿内出土の須恵器を編年している(西・1981)。我々が第IV期後半と呼んでいる坏が7世紀第I四半期から出現しており、また第IV期前半としている蓋坏が口径10cm以下にまで小形化しながら第II四半期に及んでいる点は注目できる。さらにTK 217の須恵器を第III四半期に、蓋のカエリ消失を第IV四半期に比定して、7世紀代の編年を組立てている。

西 編年

そこで次に述べるように系譜が違ふ須恵器相互の併行関係について、技法の面から須恵器に検討を加えると共に、編年に対する私見を述べてみたいと思う。

須恵器環の
二者

7世紀代の須恵器環には、多くの方が論じているように、二つの流れがある。一つは6世紀代から続く蓋受けを有するタイプで、これは6世紀の半ばに16cm程度に口径を大きくした後、次第にその法量を減じ、口径8cm前後に小型化する。

これに対して、身受けをその蓋に有するタイプは、7世紀の末にはその口径を15cm程に拡大させる。さらにこの蓋は当初は箱型の無高台の坏身がそれとセットになり（TK 217段階）、最終的には蓋の身受けが消失するのである。

こうした二者が湖西市大沢窯と共に焼成されている点と法量変化の方向性から、ある時期同径同大で二つの形態の蓋環が同一生産地内で製作されていたと考えられる。

技法の検討

加えて、技法論から7世紀代に比定できる須恵器坏身の底部調整技法を観察すると、

- イ) 体部下半からの不連続な底部回転ヘラケズリ調整。
- ロ) 体部下半から連続した底部回転ヘラケズリ調整。

の2種が従来第IV期前半とされてきた坏身にみられる。これに対して従来第IV期後半とされてきた坏身には、その器形が箱形となるため、

- ハ) ヘラケリ放し後、底部ナデ調整。

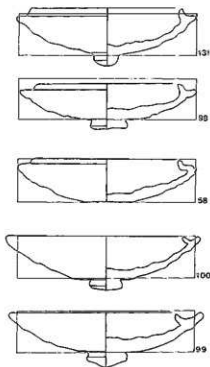
による坏身が主体を占めるようになる。

他方第IV期前半とされてきた坏蓋はイ) またはロ) の技法によっており、また第IV期後半の坏蓋は丁寧なナデ調整が施されているためはっきりしないが、ハ) によるものは全く無いのである。

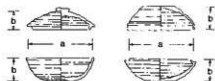
さらに重要な点は第V期と呼ばれる奈良時代の坏身、坏蓋共にイ) またはロ) の技法によっており、器形は相異しながらも、技法は保守されている様子が窺えるのである。従って恐らく生産地では古墳時代後期の技法を保存しながら、第IV期前半から第V期までの坏を製作する一方で、その途中で一定期間第IV期後半とされる箱形の坏が製作されたと考えられる。さきの大沢窯、川尻窯のあり方も上述のとおりであったと想像できる。

この様に考えてくると、量産を指向した当時の工人達は、同形態同法量の未成品を用いて、これをそれぞれ別の器種に利用したとしても不思議ではあるまい。具体的には第IV期前半の坏身を第IV期後半の坏蓋に、あるいはその逆に転用したのではないかと考えてみたのである。そこで第12図を用意し両者の相関を探ってみた。

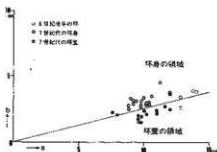
資料は鈴木氏が報告された半田山古墳群の須恵器を用いたが、それぞれの体部の立ち上



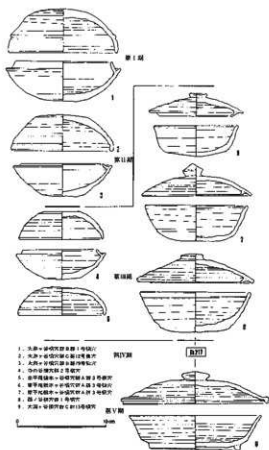
第12図 蓋・坏関係図



第13図 蓋・坏計測図



第14図 蓋・坏法量図



第15図 須恵器坏编年図

の編年試案を示してみた。第Ⅰ期とした7世紀第1四半期に相当すると考えている時期は、前代からの形態を受け継ぐ坏で占められ、口径12cm前後を測る。第Ⅱ期は第2四半期にはば相当すると考えているが、第Ⅰ期と同形態の坏で終始し、口径を10cm程度に減じさせる。ただ印籠蓋の出現が長頸壺の蓋として、この時期に見られるようになるのではないかと推定される余地を残しているが、坏以外の器種についての型式組列がはっきりしない現在、遑断することは避けておきたいと思う。

第Ⅲ期とした7世紀第3四半期に相当する時期には、さきに述べた論拠から、古墳時代後期を通じて製作されてきた坏は、口径10cmを割り、9~8cmと小形化する。これに加えて蓋に身受けをもつ坏蓋とこれとセットになる坏身が新たに使用され始め、この時期に両者が併用されていると考えている。しかし、川江氏の言及にあるように(川江・1979)、一方が使用され他方が使用されない古墳や横穴が確かに存在していて、これが両者の間に年代差を置く一つの根拠とされてきたのである。

これに対する反証としては、一例として菊川町大瀬ヶ谷横穴群C群13号横穴のあり方をあげることができる。この横穴は3基の箱式石棺を有しており、坏には1)口径10cm代の蓋受けを有する高坏、2)口径10~11cm代の蓋受けを有する坏身、3)口径12cm前後の平底の坏身、4)第Ⅴ期の蓋坏が出土している。一棺に対して一型式の坏を想定すれば、1)に対応する須恵坏を見出すことができないが、1)、2)や3)、4)の時間差を想定するのが最も適当であろう。卑弱な論拠ではあるが、異形態の坏が同時に使用されていた事を

がりは非常に近似し、口径も極めて近いものがあることが判る。勿論生産地内での様子を検討してからでないと言明できないが、これを根拠に同時期であるとしてよいと思う。

さらにこの事を補強するために、第14図に須恵器蓋坏の法量を示してみようと思う。

第14図に示した須恵器の計測は第13図のように行なった。セット関係がはっきりしない資料を纏めて扱うため、身と蓋に共通した口径値(a)と器高値(b)を求めてみた。

こうして得られた第14図には、口径値の集中と器高値の分散が現われている。即ち身の領域と蓋の領域の分離は器高の値の違いと理解できる。

そして第Ⅳ期前半と後半の蓋と身が集中する箇所は口径が10cm前後であるが、これは蓋と身の相互が転用される可能性がここに集中していることを示していると言えよう。

即ちこれを同時期と判断して第15図

編年試案

物語っていると思う。本地域の組合わせ式箱式石棺を有する横穴では、壁材を支持するための溝を設けるものが多く、従って追葬の回数を明確にし得るものが多く、土器の時間差を測るには有効であろうと思われる。

明器としての機能

そこでさきの川江氏の指摘にかえると、まず新たに出現した器にはより強く「明器」としての機能が付与されたと想像される。また造墓の活発化が必要の増大をもたらしたために、日常雑器であった伝統的な須恵器が動員され副葬されたのではないかも想像できる。

また両者の併存を第2四半期に置くとする鈴木敏昭氏の論説（鈴木・1984）がある。傾聴すべき指摘であるが、さきに述べた法量変化の方向性から推して、併存は第3四半期に求めた方がよいと思われる。いずれにせよ、両氏の論に対しては未だ説得力ある根拠を提示するには至っていない。大化前後の土器編年は再度根拠から考えなおさなくてはならないであろう。

第Ⅳ期とした7世紀第4四半期の須恵器環は、近年、県内ではTK 217と同形態の土器が発見されはじめており、その絶対数が少ないことから極めて短期間に使用されたと考えられ、あるいは第Ⅲ期の坏の使用を第4四半期の前半まで上げた方が実際に近いかも知れない。

以上のように坏の編年を整えた上で横穴の展開を眺望してみたいと思う。

横穴の生成

2) 横穴の生成と消滅 これについても平野氏の概観（平野・1983）がある。

菊川流域の横穴群は、以前から説かれていたように、速考研編年第Ⅲ期中葉の須恵器を出土する横穴が存在することから、6世紀後半には既に造墓活動を開始しており、それらの横穴には、大東町毛森山穴下峠横穴群B群17-1号横穴、小笠町宇洞横穴群1号横穴、菊川町杉森横穴群や同町大淵ヶ谷横穴群B群7号横穴があり、これ以降に大横穴群を形成する横穴群の一隅で、この時期に造墓が開始されている点は重要である。こうしたあり方は掛川市域での最初期の横穴である宇洞ヶ谷横穴、山麓山横穴が、それぞれ単独横穴である点と相連している。

造墓の盛期

7世紀代にはいと、菊川流域の横穴群は活発な造墓をはじめが、例えば大淵ヶ谷横穴群の様子をみると、全横穴の約半数が第15図の第Ⅲ期に造墓を開始しており、菊川流域でも爆発的に横穴が造営されるのはこの第Ⅲ期に相当すると考えられ、大きな画期を7世紀中頃以降に求めるのが適当であると言えよう。

横穴の終末

8世紀代にはいっても追葬の形で横穴は営まれている。また横穴の最終末の形態である火葬骨埋納用と考えられる、玄室長1m以下の横穴が造られるようになる。このような形態の横穴は、確かに遺物がなく、時期決定は困難であるが、7世紀後半から8世紀にかけての横穴の「小型化」からみると、仲展葬を前提とした棺の埋納を最早諦めた段階、即ち火葬が導入された段階の横穴と言えよう。繰返し述べてきたように横穴墓制の終末には、火葬が導入されるという状況は、遠江ばかりでなく伊豆を含めた全県的な出来事として注目される。

内部主体の変化

次に内部主体の変化を追ってみると、繰返し述べているように、当地域では組合わせ式箱式石棺が顕著に用いられている。しかしこれに混じって板石を床面全体に敷き並べた横穴や棺の部分に限定して敷いた横穴が散見される。床面に残された溝を手掛りに、床面の板石が追葬時に箱式石棺を崩して敷き直した可能性を推測できる横穴もあるが、「筒型構造」を呈するまでに退化した横穴で、棺床を有する横穴には溝を検出したものではなく、従ってこの段階の横穴では、最早箱式石棺の埋納を企図していないとしてよいであろう。た

だし8世紀にはいっても箱式石棺を用いて追葬を行った横穴も確実に存在していて、この変化は画一的に進行したとは考えられない。むしろ横穴築造時の内部主体の選択に大きく依存していると考えられる。

この石棺から棺床への変化は、菊川町篠ヶ谷横穴群A群14号横穴（7世紀代）、同町山本横穴群A群11号横穴（7世紀後半～8世紀前半）で年代を押えることができ、両者は共に「筒型構造」に近い形態をとり、典形と言えよう。また菊川町東平尾しいでの谷横穴群A群3号横穴（7世紀後半）は、玄室形態が占相を呈するものの、棺床が確認できる横穴である。

以上のように菊川流域の横穴にあっては、8世紀に至るまで箱式石棺への埋葬を継続しながらも、恐らくは7世紀後半に築造された横穴においては、同一素材を用いて、石棺から棺床への変化をもたらしたものと想像している。このような変化は、玄室規模の縮少と「筒型構造」の受容、即ち横穴築造の消力化及び葬法の簡素化が図られての結果であると解釈したいと思う。ただこの葬法上の簡素化は、薄葬を強制することで逆に墓に権威づけを果そうとした所謂薄葬令の意図とは全く異ったものであることに留意しなくてはならないのは言うまでもない。

それでは横穴の生成を促した要因は、また7世紀後半代の爆発的な盛行をもたらした要因は何であらうか。

既に述べたように、横穴の生成については、前述のように初期の横穴が大きく群集するという特色がある。原ノ谷川流域での字洞ヶ谷、山麓山横穴が共に単独である点とは異って、菊川流域ではこの二者に比べ得る規模を有する横穴もみられない。さらにこの二者が前代の前方後円墳の被葬者に直接つながる被葬者の墓と想定できること（渡辺・1983）とも相異すると思われ、菊川流域の横穴墓制の成立には、別の角度から検討を加えなくてはならないと思う。

既に述べたように、『古墳から横穴へ』の移行は、この地域を含めた東遠江全域での現象と考えられたが、その際内部主体をそのままの形で継承することから、横穴造墓集団は古墳造墓集団とは何ら異ならない、同族同祖の集団であると窺い知ることができた。またその移行の時期は、原ノ谷川流域では6世紀前半代であるのに対し、菊川流域では6世紀後半代と時期が遅れることも明らかである。菊川流域での前方後円墳からの移行がはっきりしないため首長層の動向については言及できないが、嶺田遺跡、八丁遺跡、高橋遺跡等の沖積地に占地する6世紀後半の集落跡のあり方から、複数の場所でも沖積地の本格的な開発が始まり、この開発の指導者層（「村の首」）に横穴墓制がまず定着したと考えている。しかしながら、開発の直接の契機となった事柄については、はっきりしていないのが現状である。

従来から、この契機のひとつに、「屯倉」の設置を想定する意見がある。

しかしこれに関しては、原島礼二氏が説くように、書紀に表われたミヤケの設置記事が欽明天皇16年（555年）、同17年（556年）、推古天皇15年（607年）の記事を基にした編者の造作であると論証されること、また蘇我稲目の手で行われた欽明朝のミヤケ設置が畿内周辺に限られることを見逃してはならないであろう。ミヤケ制と横穴墓制の関わりを考える場合には、時期については6世紀後半代のミヤケ設置は可能性が薄く、原ノ谷川、菊川両流域での横穴墓制の成立に、それが大きく関与しているとは判じ難いと言えよう。

東国に於ては、何よりも推古天皇15年「亦毎国置屯倉」の記事を重視すべきであろう。

横穴の生成
要因

屯 倉

恐らく国毎に設置された7世紀前半代のミヤケを中核として、また律令制整備の波を受けて、開発の成功と生産力の増大を果した横穴被葬者集団は、大規模な造墓活動を展開したと想像される。

よってミヤケの果した役割は横穴墓制成立期にはではなく、むしろ在地の生産力の増大を前提として、その上に立ってミヤケが成立し、より一層の生産力の伸展が図られたと考えられる。従って横穴墓制の爆発的な盛行に寄与したと評価している。

II 池ヶ谷横穴群について 一まとめにかえて一

ここでは、まず再度本横穴群についての内容をまとめた上で、以上に述べてきた菊川流域の横穴群の発展と衰退の中に池ヶ谷横穴群を位置づけたいと思う。

1. 池ヶ谷横穴群は、3基で1単位群を構成する横穴群である。遺物の出土がなく明確に時期を決定することができなかった。
2. 1号横穴は、残存長2.60 m、玄室長2.0 m、玄室高1.31 mを測り、玄室平面形が三角フラスコ形を呈する。断面形はドーム形を呈し、羨道部の大半が削平されていた。
3. 2号横穴は、残存長3.48 m、玄室高1.20 mを測り、玄室平面形は三角フラスコ形で羨道部には排水溝を備えていた。平面形は1号横穴よりも退化した様子が窺える。
4. 3号横穴は、完存しており、玄室は筒型構造に属する。墓前城を含めた全長は3.08 mで、玄室長1.13 m、玄室高1.05 mを測り、平面形は大略隅丸方形を呈する。羨道は長さ1.2～1.5 m程度で、ここに封鎖石が完存していた。内部主体は板石と円礫による棺床を設け、木棺が想定される。2号横穴よりもさらに退化した形態の横穴である。

以上のような内容をもつ本横穴群は、1号→2号→3号の順序で構築されたと考えられる。また内部施設も恐らく共通して、板石による棺床を伴った木棺が想定される。

時期については、他の横穴から類推するしかないが、特に3号横穴については、菊川町山本横穴群A群11号に酷似し、7世紀後半でも末葉の年代が相当しよう。また1号、2号横穴についても、板石の棺床を設けていたのではないかという仮定に立てば、やはり7世紀代のそれも中葉の時期が求められると思われる。従って本横穴群は、菊川流域で横穴造墓の盛期を向えた時期に成立した横穴群であると想像できる。

さらに、本横穴群のように、3基で一群を構成する小規模横穴群が、菊川流域でも小笠町内には散見される点については、開発に際して、大集落単位の開発ではなく、その下位に位置する恐らく「家族」単位の開発が展開されたと考えられ、小規模であっても独立した開発経営を反映して、横穴もそれぞれ独立した占地をすると思われている。

尚、調査にあたっては、町教育委員会の多大な協力があつた。

大柳寅雄、宮城義信、竹内英俊の三氏には、現場での作業に際し助力をいただいた。

文末ではあるが、感謝申しあげる次第である。

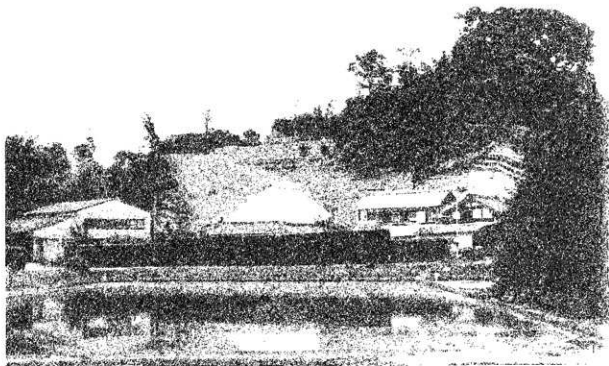
註

1. 愛知県教育委員会 『朝日遺跡Ⅰ』 第一法規 1982
2. 第1図に示したが、従来言われてきた釜太夫遺跡は八丁遺跡の誤りであり、遺跡名は地元での呼称、字名に従うべきである。変更して登録すると共に、以後この名称を冠して呼びたいと思う。
3. 平野・1983に従った。
4. 横穴の成立を「屯倉」の設置を契機とした渡来系氏族の定着に結びつけることは、本地域にあっては現在までのところ不可能である。それよりも、これも以前から述べてきたように、横穴と小円墳の副葬品と玄室構造の類似から、両者の被葬者層が変りないと考えられる点に注目したいと思う。
5. 原島礼二『『日本書紀』のミヤケ設置記事』『古代文化』vol. 26-1 古代学協会 1974

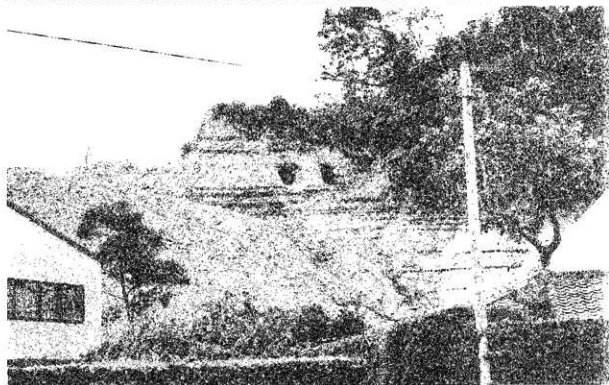
引用文献

- | | |
|-----------|---|
| 池谷・1962 | 池谷和三 「静岡県小提山第1号横穴墳」 『先史学研究』4 |
| 小笠町・1982 | 植松章八他 『嶺田遺跡』 小笠町教育委員他 |
| 県教委他・1968 | 向坂綱二 「掛川市本村横穴群A群発掘調査概報」 『東名高速道路 (静岡県内工事) 関係埋蔵文化財発掘調査報告書』 静岡県教育委員 会他 |
| 県教委・1983 | 斉藤 忠他 『遠江の横穴群』 静岡県教育委員会 |
| 川江・1979 | 川江秀孝 「静岡県下出土の須恵器について」 『静岡県考古学会シ ンポジウム』2 静岡県考古学会 |
| 鈴木・1984 | 鈴木敏則・佐藤由紀男 『半田山A小支群・半田山Ⅲ遺跡』 浜松市 遺跡調査会 |
| 西・1981 | 西弘海 「土器様式の成立とその背景」 『考古学論考』 平凡社 |
| 平野・1983 | 平野吾郎 「菊川流域の横穴群!」 『遠江の横穴群』 静岡県教育委 員会 |
| 渡辺・1982 | 渡辺康弘 「石室空間論序説」 『駿河山2号墳発掘調査報告書』 金谷町教育委員会 |

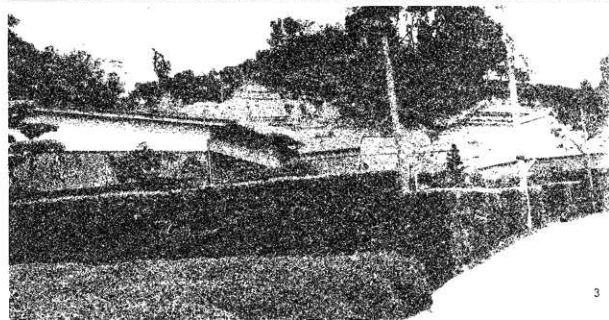
圖 版



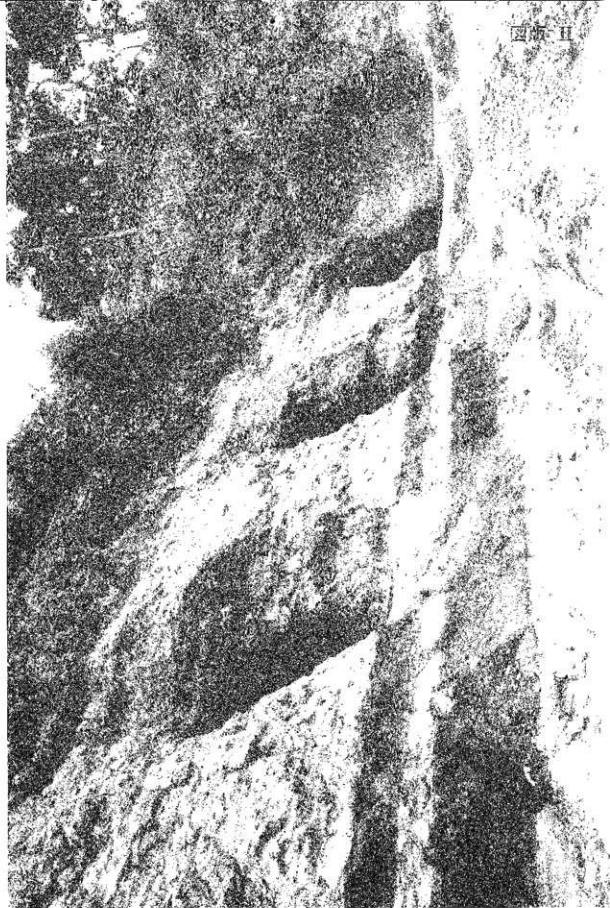
1. 遺跡遺景 1



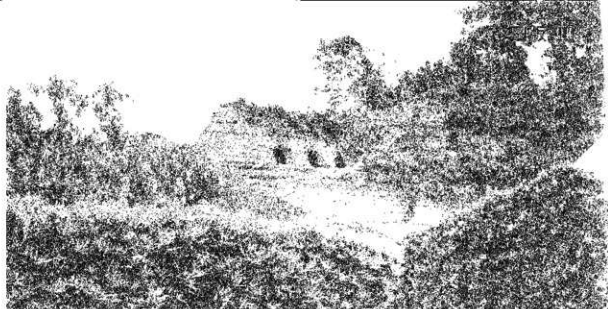
2. 遺跡遺景 2



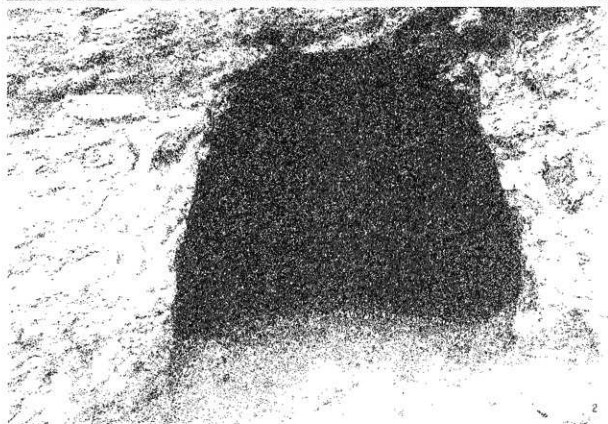
3. 調査風景



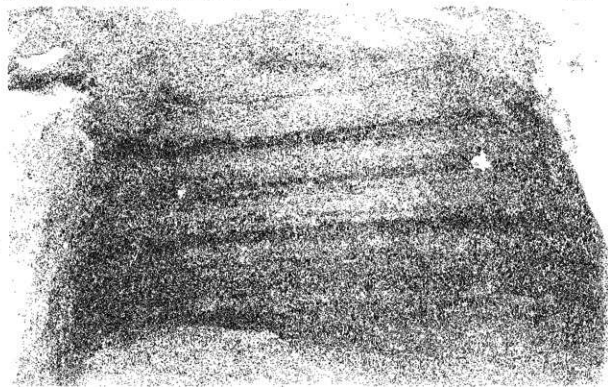
1·2·3号横穴
完備状態



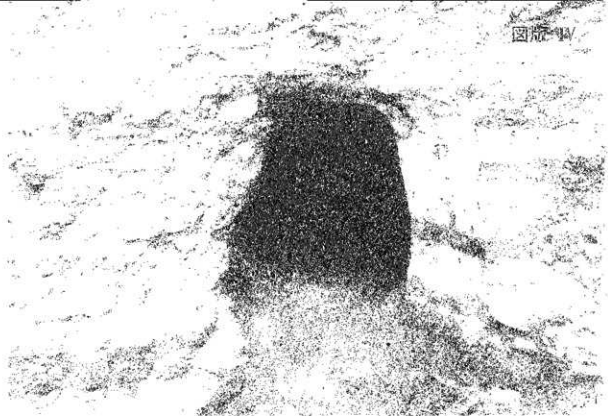
1. 完振遺景



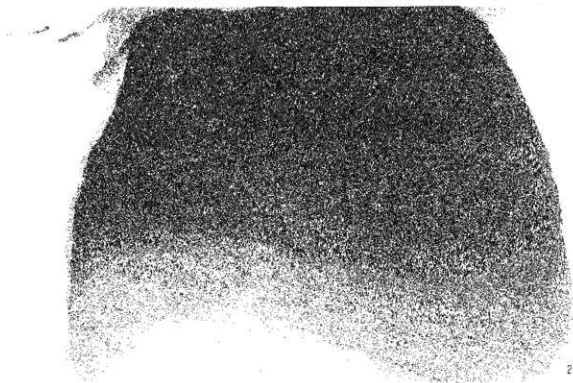
2. 1号横穴
開口部



3. 1号横穴
奥壁



1. 2号横穴
開口部



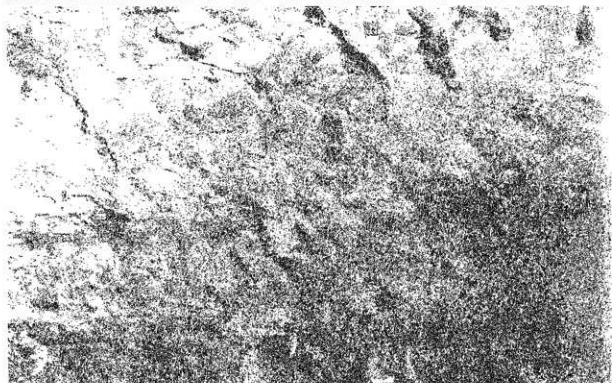
2. 2号横穴
奥壁



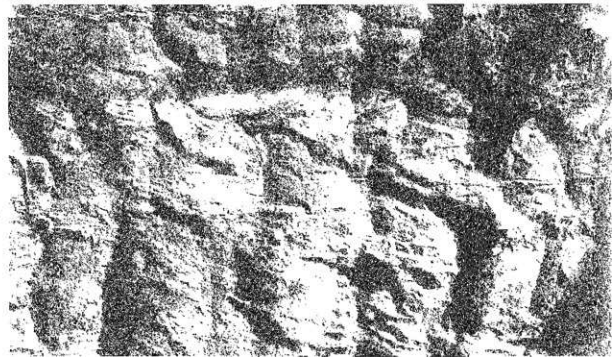
3. 2号横穴
排水溝



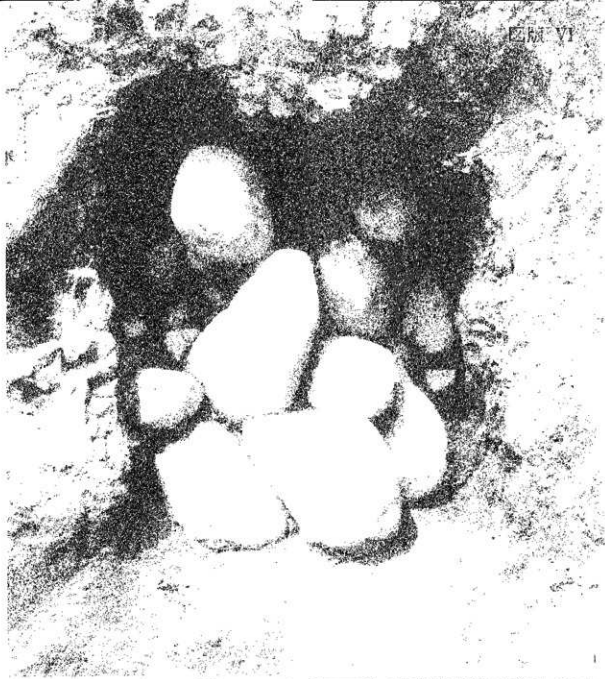
1. 2号横穴
天井部 / ミ根跡



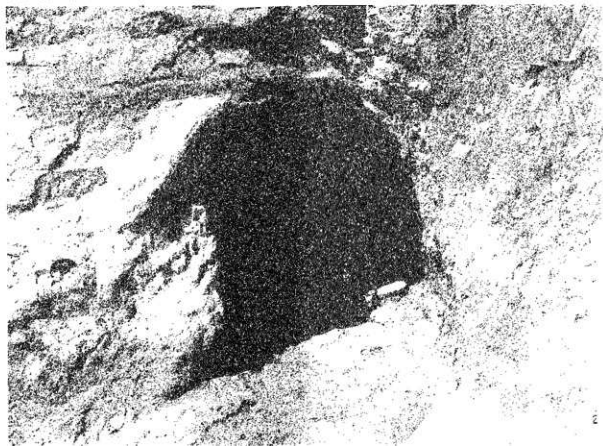
2. 2号横穴
天井壁部 / ミ根跡



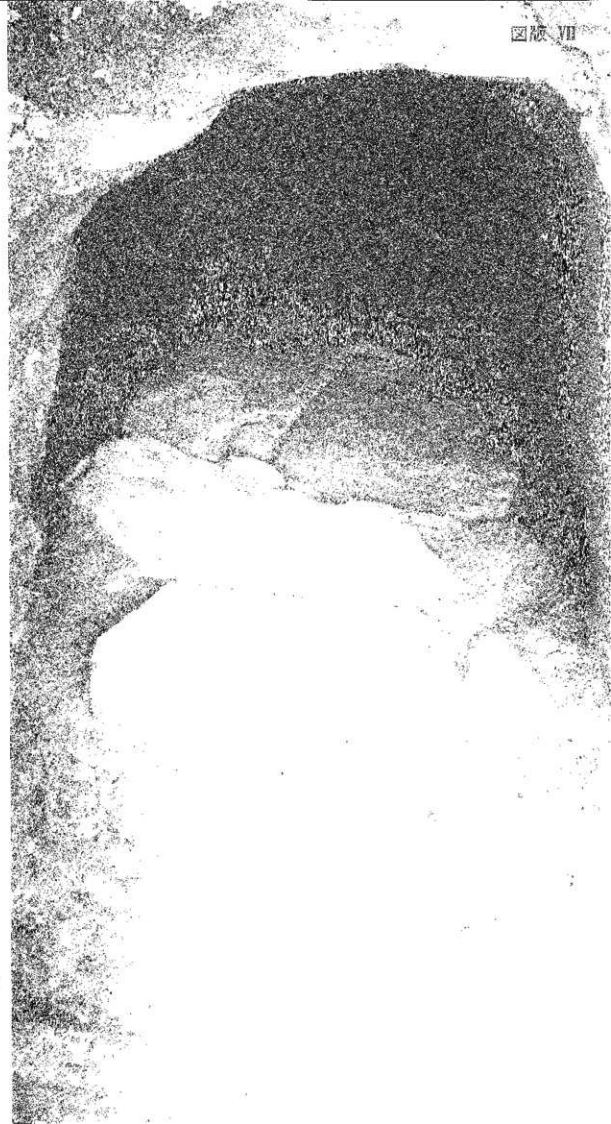
3. 2号横穴
右側壁 / ミ根跡



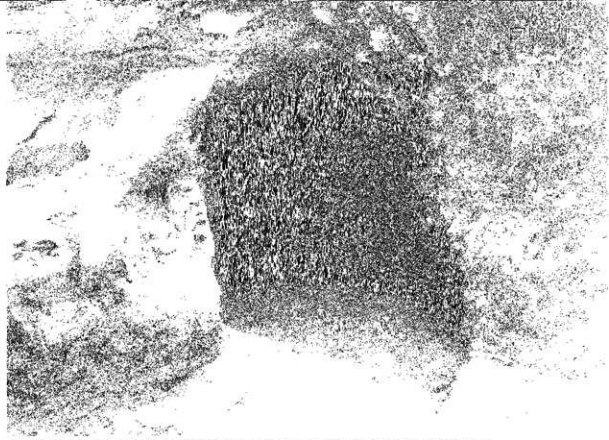
1. 3号横穴
封鎖状態



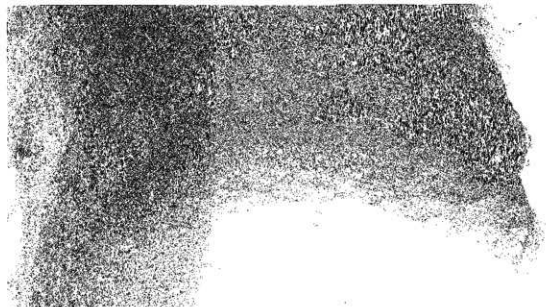
2. 3号横穴
開口部状態



3号横穴
棺床状态



1. 3号横穴
完拓状態



2. 3号横穴
床面状態



3. 3号横穴
右側壁状態



4. 3号横穴
天井部ノミ痕跡

池ヶ谷横穴群発掘調査報告書

昭和59年3月25日 印刷

昭和59年3月30日 発行

編集 渡辺康弘
発行 小笠町教育委員会
印刷 株式会社三創
静岡市豊田3丁目5番30号
TEL(0542)82-4031